

# 音 楽 科

乗 富 章 子  
荒 木 泰 彦  
中 川 晶 子

## 1 音楽科の本質について

私たちは、音楽の本質を次のように考えた。

音に心を動かし 音を楽しむこと

私たちの身の回りには、さまざまな音があふれている。心和ませる音もあれば、不快を感じる音もある。私たちが音に接したとき、快不快を判断し、より快い音を求めていこうとするのは、ごく自然なことである。自分にとってどんな音が快いのか、自分が大切にしたいのはどんな音なのかを感覚的に捉えることができれば、音が音楽というまとまりになったときにも、快い、楽しいと感じ、音や音楽を表現したり鑑賞したりすることを心から楽しむことができるようになると思われる。

一方で子どもは、心むくままに気持ちよく歌ったり、楽器を演奏したりするとき、音楽の楽しさを実感し、その喜びを味わっている。そこでは音楽の美しさに浸って、自分の気持ちや想い、夢や想像の世界などを大きく膨らませながら、生き生きと表現している姿を見ることができる。

以上のことから、音楽科の本質を「音に心を動かし 音を楽しむこと」ととらえることとした。「音に心を動かす」とは、音楽も含めた音そのものに関心を持ち、より良い音を求めていこうとすることであり、「音を楽しむ」とは、より良い音を求めていこうとする過程や行為を自分自身でまたは友達と一緒に楽しんで行うということである。

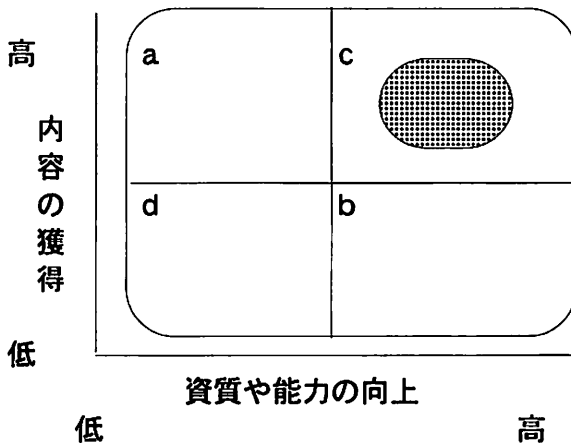
## 2 音楽科の学びについて

音楽科で扱う内容は、歌唱、器楽、鑑賞、そして即興的な表現をふくめた創作の四領域である。音楽科の学習では、これらをお互いに関連づけながら学んでいる。特に表現と鑑賞は表裏一体のものと捉え、子どもは表現と鑑賞の活動を繰り返す過程で、よさや美しさを追求する。

内容の獲得の面からみると、教材を通して音楽的要素を学んでいく。リズム、拍子、速度など音楽を構成する要素を身に付けながら音楽の楽しみ方を学ぶのである。

また、資質や能力の面からみると、楽しさを実感し音楽の美しさやよさを感じ得できるような感性を磨いていくことが求められる。

両面での追求が音楽の芸術性に迫る力として培われていく。したがって、構造図は右のようになる。



## 3 本質にもとづく基礎・基本について

次に、本質にもとづき、音楽科に培っていきたい基礎・基本について考えてみたい。

表現や鑑賞の対象となる音や音楽に対して、子どもが大きな魅力を感じ、楽しさを実感しながら活動していくことがなによりも大切である。そうすることで音楽の美しさやよさがわかり音楽に対する感性が培われていくと思われるからである。

感性が培われることによって、子どもが音楽の美しさやよさを感じ取る広さも次第に拡大するだろう。この音楽の美しさやよさを感じ取る広がりや「音楽的感受の世界」と私たちはとらえてきた。

私たちは「音楽科の基礎・基本」を、楽しさを感じながら表現や鑑賞の活動を重ねていくことによって、子どもが自分の音楽的感受の世界を広げ、音楽的な感性を高めていくことと考えた。すなわち、音楽科の基礎・基本とは、つぎのようなことである。

楽しさを感じながら自分の音楽的感性を高めていくこと

#### 4 単元を構想するにあたって

音楽科では、自己の学びを深めるということや、「音に心を動かし 音を楽しむ」活動をしていくなかで、子どもが自分の音楽的感性を高めていくことと捉えている。

表現の過程では、音を連ねただけの演奏をするのではない。音に自分の想いを込めたり、自分の好きなところを大切に表現したりしながら、次第に音楽としてのよさが現れる表現へと高まっていくものである。そこへさらに、友達と心を合わせて表現する喜びや、友達のよさを認め合う温かさなどが加わってより豊かな表現が生まれていく。その中で子どもは自分の音楽的感受の世界を広げ、感性を高めていくのである。

そのような活動を促すために、次のような視点をもって単元（題材）を構想していく。

##### (1) 教材との出会いを工夫することによって、一人ひとりの題材へのはたらきかけを促す

音楽科の学習にとって、教材との出会いは重要な意味を持つ。教材と初めて出会ったときの感動が、子どもの心に直接働きかけ、子ども自身の想いとして表現や鑑賞に向けて膨らんでいくからである。私たちは、教材が子どもにとって大きな魅力を感じられるものとなるように、出会わせ方に様々な工夫をしていきたいと考えている。芸術としての価値の高い音楽を聴く、演奏している楽器に直接触れる、原曲を知る、イメージを広げるために映像などの視覚へ訴える活動を取り入れ、表現や鑑賞への意欲につなげたい。

##### (2) 音や音楽そのものに関わる活動を重視することによって、一人ひとりに表現したいという想いをもたせる

音で確かめ、音で共感し、音そのものの音楽的価値を求めるなどの、一人一人の音に関わる活動を、できるだけ保障する。具体的には、子どもが持った想いを音で確かめていく、探り弾きや探り弾きをして自分のイメージに近い音を見つける、もっとこうしたいと自分のイメージをさらに高めていくための奏法を探す、などが考えられる。また、私たち教師も、子ども一人一人の想いを表現に生かすために必要な技能を効果的に教えることが求められる。その子にとって表現をする上で、どうしても必要とされたときに初めて、技能習得のための練習が、その意義を持つと考えている。

##### (3) 自分なりの想いを広め合う場を設定することによって、音楽の美しさやよさの感じ方を広げる

個々の想いが自分だけの想いにとどまらないように、イメージを話し合う、試しの演奏をする、同じ想いを持つ子同士でグループを作る、友達の演奏に共感するなど想いを広め合って、よさを自分の表現に生かせる働きかけをしていきたい。

学習課題に対して一つのめあてを定め、それに向かって様々な試みをする従来型の学習にとられず、個々がそれぞれのめあてをもって課題に取り組むことも可としたい。各々の想い描く音楽像に向けて様々なアプローチを試み、それぞれの違いを認め受け入れ、自分の表現のヒントともする前向きな姿勢を期待している。

##### (4) 互いに聴き合う場を設け、よさを認め合うことによって、自分の変容の自覚を促す

一人ひとりの表現を聴き合う場を設け、自分の想いを確かめ、自分の向上が少しでも自覚できるようにしたい。自分の表現のよさを認める友達からの発言や、教師の励まし、ちょっとしたアドバイスが有効に働く場でもある。単元（題材）の最終段階では、発表や録音で自分の学習の成果を自覚すると共に、友達のそれをも認め、次への新たなエネルギーを生み出す力となることを願っている。

## 5 実践例 — 6 年 —

### (1) 題材名 声・楽器・リズムのアンサンブルを楽しもう

- (2) 目標 ・重唱や重奏の経験から、リズムや音色の創作力や表現の仕方を身につけ、イメージにあった音楽創りを楽しむ。  
 ・お互いの演奏を聴き合い、音楽的な発想や表現の工夫を交流しながら、今後の音楽活動に生かそうとする。

### (3) 指導にあたって

#### 本題材の基礎・基本について

本題材で扱うアンサンブル活動では、歌唱・器楽・創作の表現活動や様々な鑑賞活動を通して、音を楽しみながら音楽的感性を高めることをねらった。

題材を通して行われる演奏体である「アンサンブル」とは、重唱や重奏で表現されるように少人数によるもので、個々の想いやイメージが生かされる機会が多く、各々の役割が明確であり、高学年の学習には有効な形態である。自己のよさを発揮しながら、お互いの音楽を共有化する活動の繰り返しの中で、「音楽的感性」が高まると考えた。

例えば、二部重唱で二声の重なりを味わうことで「和声感」を獲得したりリコーダーの柔らかな響きを工夫する中で「音楽の美しさ」を感得していくことが、本題材の基礎・基本として挙げられる。

表現・鑑賞という視点で言えば、山田耕筰・ボディパーカッション・世界のリズム・友達の演奏を聴く、といった『鑑賞＝受信』の部分を生・体・楽器を通して個々の想いを表現し、創作活動を随所に設定するという活動を螺旋状に配置した。この活動の度に、「音楽的感受の世界」を広げながら、感性を高めていくと思われる

題材の全体を通して、「基礎基本を身につけながら「感性を高める姿」が実現されるようにいくつかの支援の手段を、題材中に設定することとした。

- ・歌唱、器楽、鑑賞、リズム創作等の多様な学習活動
- ・学習単位を活動の特性に合わせて、学級・グループ・個人での活動設定
- ・新曲や既習曲を織り交ぜての多様な教材曲群
- ・楽器紹介掲示物の作成
- ・伴奏、効果音、リズムパターンにパソコンの活用
- ・電子楽器・各種旋律楽器打楽器の準備

### 単元計画 (総時数 12時間+課外)

主な活動と内容	学びを深めるために
<div>声・楽器・リズムのアンサンブルを楽しもう</div>	
<b>第一次：声のアンサンブル（重唱）</b> ○『山田耕筰の歌曲』を聴く ・声の響き、表情、発声に着目 ○『エーデルワイス』『マルセリーノ』を歌う ・つられずに歌う、バランスの工夫	①②③ 鑑賞 歌唱
<b>第二次：楽器のアンサンブル（重奏）</b> ○リコーダーのアンサンブルを楽しむ 『エーデルワイス』『オーラリー』の二部重奏 音色やバランス、曲想の表現 ○曲のイメージにあった音色を工夫する ・シンセやオルガンの活用	①②③ 器楽 器楽
<b>第三次：リズムのアンサンブル</b> ○いろいろなリズムアンサンブルを味わう 『ボディパーカッション』『ケチャ』 ○世界のリズムを体感する 【マンボ】【ジャズ】【サンバ】【マーチ】【タンゴ】 ○リズムと合わせる曲を選んで伴奏を創作する ・体伴奏で創作＝手拍子・膝・指・足踏み・声等 ・打楽器への発展 基本的奏法 音色や奏法の工夫 ・発表会 ・録音、録画	①②④ 鑑賞 創作 器楽 創作
次題材への意欲付け→合唱や台奏の学習にも生かそう	

学びを深めるために

① 教材の出会いを工夫し、一人一人の題材へのはたらきかけを促す

児童がアンサンブルのよさを知り、さらに「やってみよう」という意欲付けを促すためには初発の鑑賞教材がポイントになる。「声のアンサンブル」では声質やバランスが明確に感じ取れる『山田耕筰の歌曲』をLDで鑑賞し、重唱における個々の役割や表情豊かに歌おうとする意識を持たせたい。「楽器のアンサンブル」では、同種の楽器の音の重なりを『エーデルワイス』や『オーラリー』といったスローな範奏を聴くことで味わわせたい。さらに、異種楽器の響き合いへの活動を導くために、シンセサイザーで多種の音色を紹介する。

リズムアンサンブルの活動では、フレーズや歌詞よりも純粹にリズムに着目させるために、パソコンを使ってリズムパターンを作成し提示する。また、この活動でリズム伴奏にのせる曲は、既習曲を中心にした親しみのある曲にし、学習前後の子どもの学びや音楽的深まりが明確になるようにする。

② 音や音楽そのものに関する活動を重視し、表現したいという想いを持たせる

アンサンブル学習では、「音程がつかれない」「きれいな音の響きを出す」「正しい奏法で演奏する」等、技能面での高まりが必要である。そのために、時間や場所の確保・多種の楽器を用意し、児童の要求が実現できるような条件をつくる。

一方で、同種音であるリコーダーアンサンブルを他の旋律楽器のアンサンブルへと発展させ音色の響き合いを感じる・ボディパーカッションを打楽器で置き換えして表現する活動を取り入れて、リズムへの関心を高める等、子どもの音への思いが高まるような支援を工夫する。

③ 想いを広め合う場を設定し、音楽の美しさやよさの感じ方を広げる

本題材では、グループ学習が主となり、グループ内での意見交流やイメージを共有することに効果が上がると思われる。しかし、全体の場での交流が少ない。そこで、リズム伴奏の際には、あるグループのリズム伴奏に合わせて他が歌う活動を取り入れた。単に聴覚に訴える共有化であく、同じ音楽を分かち合うもの同士の立場として、音楽を感じ取ることができるであろう。

④ 互いに聴き合う場を設け、よさを認め合い、変容の自覚を促す

本題材は、個々の想いを表明する機会が多いとともに、互いに創った音楽を交流することも多い。アンサンブル形態なので、一人一人の表現の工夫なども聴き取りやすく、認め合う場での深まりが大きい。リズムアンサンブル活動では、リズムが違っていても、同じ役割（パート）の子ども同士の交流を大切にし、同じ役割の子どもの考えた工夫を知ること、変容を促す手段とする。また、録音や録画を通して、自己の成果を認識する手だても設定したい。

(4) 本単元における授業の実践と考察

本単元において、学びを深めるための手だてがどのように実践され、課題が残ったかについて、第三次にあたる「リズムのアンサンブル」に絞って考察する。第三次は、リズム創作という子ども達にとって、経験の少ない領域をあつかっている。また、最も活動が多種で、児童の意識の変容や成長の姿がとらえやすい。そこで、第三次に絞って実践と考察を述べることにした。

① 思考の変化をとらえる6つの場面

学習を進める中で、鑑賞・創作・器楽領域における、6つの場面を設定し、児童の思考の変化や高まりを記録した。これらの場面毎に児童の思考が変容し、学習への意欲付けや児童間の意見交流・自己のふりかえりに役立てることができた。

ア．ボディパーカッションVTR視聴

イ．ケチャLD視聴

ウ．リズムパターン選択

エ．音色やリズムの工夫

オ．選択打楽器

カ．学習最後の感想



体伴奏リズムのグループ練習

「意識の変容」が顕著であった、4名の抽出児の事例

	抽出児 A夫	抽出児 B子	抽出児 C美	抽出児 D郎
6/22 ボディパーカッション	おもしろいが意味わからない	間の取り方やリズムの組み合わせがすてき	明るく飛び跳ねているやってみたい	思わず手をたたきたくなる本当の花火のよう
6/29 ケチャLD	とりつかれたような音楽で気持ち悪い	手と口の激しい音楽 儀式的音楽のようだ	手の使い方や声が独特でストーリーある物語	めちゃくちゃやっているようでわからない
7/4 リズムパターン選択	サンバ：簡単そうだから選んだ	タンゴ：「だんご三兄弟」がすき	ジャズ：楽しそうであるさくないから	マーチ：わかりやすいリズムにしたい
7/4 音色やリズムの工夫	はっきり聞こえるように壁をたたく	難しいので他の音につられないように工夫	遅れないこと・バランスを合わせること	手拍子でははっきりしないので椅子を使う
7/7 選択打楽器	ベース：コンガ	ビート：クラベス	アクセント：シンバル	フレーズ：カウベル
7/11 最後の感想	おもしろかった いろんなリズムで音楽がますます魅力的になる	一人一人がしっかりしないと合奏にはならないし バランスが大切	楽器がなくてもできたことが思い出に残った自分たちだけでもいろんなことができそう	人と合わせるのは苦手だったけどやり方次第では結構楽しいものだ

A夫のケース 普段からあまり音楽学習に関心を示さないで、技能的にも不十分である。鑑賞活動では、相変わらず関心は低かったが、リズム練習を始めた頃から意欲が高まり、ベース音を壁をたたいて表現するなどの工夫をした。最終感想では「おもしろい」という言葉が出て、学習の充実ぶりが見られた。

B子のケース 授業には積極的で、技能も高い。感受性が強く、音楽に強く反応する。鑑賞活動では、自分の世界に入り込んで独特の感じ方をしており、他児とのイメージの違いが顕著であった。グループ活動の中で、徐々に「合わせること」の大切さを知り、最後には中心になってバランスの調整に取り組んでいた。

C美のケース 音楽経験が豊かで、感性が高く意欲的であるが、友達と合わせることは苦手。当初は、個の主張が強く上手にグループ活動へ参加できなかったが、リズム練習あたりから「合わせよう」という意識が強くなり、アンサンブルの楽しさ・大切さを知ることができた。

D郎のケース 要領よく物事ができる子で、面倒見も良い。納得のいかないことには最後までこだわる性格で、「ケチャ」の鑑賞では「音楽が理解できない」と悩んだ。そこで、アンサンブル活動では、終始「わかりやすいリズム」を前面に出して、様々な工夫をしながら、アンサンブルの楽しさを学んでいった。

上記のように、鑑賞・表現の段階を経て、子ども達はアンサンブルのよさやグループ練習の大切さ、さらに歌唱・器楽・創作の技能を身につけていった。その変容の姿を正確に捉えるためにも、単元中にポイントになる場面の設定とその記録が必要であると感じた。

## ② 児童の学習を効果的に高めるリズムパターン

【サンバ】【タンゴ】など特徴あるリズムリズムパターンは、様々な単独リズムの集合体である。これまでリズム創作の経験が少ない子ども達に、効果的にリズムを意識させるために、5つの特徴あるリズムパターンを提示した。【サンバ】【タンゴ】【マーチ】【ジャズ】【マンボ】という5リズムパターンは、各々 {ベース} {アクセント} {フレーズ} {ビート} という4パートから構成されるようにした。子ども達は、好きなリズムパターンでグループを編成し、パートに分かれ、合わせる曲を決めた後、イメージに合う音楽創りの学習に入った。

## 各リズムパターングループの詳細



ジャズ風の「さんぽ」

リズム名	人数	目指すリズムのイメージ・めあて	合わせた曲
サンバ	8	・明るくにぎやか、細かい動きを大切に	オーラリー
タンゴ	5	・4拍目に神経集中！踊りたくなるリズム	空も飛べるはず
マーチ	7	・運動会の入場行進のような音楽づくり	校 歌
ジャズ	9	・一人一人の音がはっきり出せるジャズ	さんぽ
マンボ	9	・楽しさと明るさとノリノリとリズム感	巣立ちの歌

各リズムパターンの中で4パートに分かれることで、各自の役割がはっきりし、効率よく練習することができた。リズムパターンを「イメージ」に沿ったリズムになるように創作する場面でも、工夫した部分が明確になった。各リズムの交流場面では、同じパートの子ども同士で意見交換する姿も見られた。

しかし、各自リズムが打ててもグループ全体のバランスはなかなかとれず、音量が調整できないことが多かった。速さが一定しないグループは、ベースが走ったりビートが遅れるなど、仕上げるにはかなり時間を要した。また、当初は各パートの音質が「手拍子」という同じもの



「サンバ」は椅子・紙・ズックを使って創作

### ③ 体伴奏から打楽器伴奏への発展

「リズムアンサンブルには音質の違いが必要」と気づいた子ども達は、続いて「打楽器を使いたい」という意欲を持って学習に取り組み始める。

実際に、【タンゴ】グループを例にとって、＜体伴奏＞＜打楽器伴奏＞を模奏させて、他グループの子ども達の反応をとったところ・・・

C1. それぞれの音がはっきりわかって、歌いやすかった。

C2. とってもかっこいい。いろんな音でためしたらもっとよくなるだろう。

C3. 自分たちのつくった伴奏でこれだけできるとは驚いた。

など、好評であった。「僕たちも、私たちも・・・」と子ども達の関心は高まるが、学校にある全ての打楽器を自由に触らせることは、時間的にも場所的にも不可能なので、各パート毎に指定楽器をおくことにした。（下表参照）

パート名	各パートに充てた打楽器
ベース群パート	バスドラム・ティンパニ・コンガ・フロアタム
アクセント群パート	スネアドラム・シンバル・ミニシンバル・タンブリン・ギロ
フレーズ群パート	アゴゴベル・カウベル・カバサ・トライアングル・ベル
ビート群パート	ボンゴ・ウッドブロック・クラベス・マラカス・カスタネット





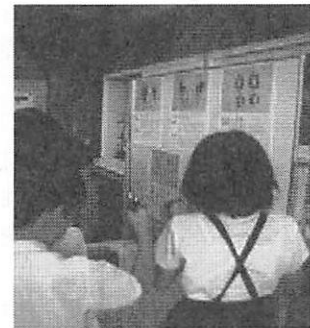
ベース群：低音重視の皮面の大きな楽器  
 アクセント群：撥音重視の打点の明確な楽器  
 フレーズ群：金属系の易奏楽器  
 ビート群：木製系の易奏楽器

ティンパニは「コイン実験」でいい音がし

打楽器を使用した経験の少ない子ども達が、より正確な奏法でいい音を実現できるように、各楽器の「楽器紹介掲示物」を作成して、各セクションに掲示した。

- ・楽器の拡大デジカメ写真
- ・楽器の正式名称
- ・楽器の歴史や由来、他楽器との関係
- ・正しい持ち方や構え方
- ・正しい奏法や音の出し方 他

※この掲示物は、他学年の学習でも活用するために、音楽室に常時掲示してある。



「楽器紹介掲示物」の活用

#### ④ 打楽器伴奏を入れて最終発表交流会

単元最後の学習は、打楽器伴奏を仕上げた後の、最後の発表交流会であった。以前の「体伴奏」による発表交流会に比べて、より豊かで個性的な響き・工夫を凝らした演出など、充実した発表会であった。打楽器を持った当初には、急に音量が大きくなって不自然なバランスの伴奏になったり、自分の演奏にめいっぱい余裕のない状況であったが、1時間の練習で随分音楽的な高まりが実現されたように思う。交流の場では、様々な好意的な意見が交わされ、各々満足して題材の学習を終えることができた。

#### 各リズムの打楽器最終編成

リズムグループ	ベース群	アクセント群	フレーズ群	ビート群	合わせた曲
サンバ	コンガ	タン布林・ギロ	アゴゴベル	マラカス・カスタ	オーラリー
タンゴ	フロアタム	スネア・タン布林	トライアングル	クラベス	空も飛べるはず
マーチ	コンガ・ティンパニ	ミニシンバル	カウベル	ウッドブロック・マラカス	校 歌
ジャズ	バスドラム	シンバル	カバサ・アゴゴ	ボンゴ・マラカス	さんぽ
マンボ	ティンパニ	スネア・シンバル	カバサ・カウベル	ボンゴ・クラベス	巣立ちの歌



「マンボ」グループの打楽器練習風景

各グループの発表は、テープ及び8mmビデオに録音録画し、自己評価できるようにした。各自のまとめは、上記「学習最後の感想」にまとめ発表をした。概ね良好な結果であったが、一部「体伴奏の方がよかった」という感想があった。これは、打楽器の奏法的な問題がクリアできなかったり、選んだ打楽器の音量バランスが悪く、体伴奏よりも聞きづらい歌いづらいということが見られたからであろう。

### ⑤ 本題材での「評価項目」の考察

本実践例の「本題材の基礎・基本」でも述べたように、題材を通して「基礎・基本」を身につけながら「感性を高める姿」が見えたかどうかを、を5つの観点から評価する。

#### ア. 活動に参加する意欲的な態度 (関心・意欲・態度)

多様な学習活動・教材曲・教具楽器を用いたために、児童の学習意欲は継続して高かった。一人一人の役割がはっきりしていることや各自の意見や思いが音楽で実現されたことも、児童のやる気を持続させる要因であったと思う。しかし、技能が伴う活動では、音楽が深まれば深まるほどついていけない児童の姿があった。

#### イ. イメージにあった発声・音色・奏法・リズムを選んだ活動 (感受・表現の工夫、鑑賞の能力)

教材曲が既習曲や親しみやすいリズムであったために、自らの音楽イメージを持つことは、ほぼ全員の子ども達にとって容易な活動であった。特にリズムアンサンブルの学習では、ボディパーカッションやケチャの視聴覚教材を扱うことで、より強い衝撃を持って学習に臨むことができた。

本単元は「アンサンブル」を重視しているために、個々のイメージをペアやグループのイメージへと発展させる活動が必要となる。程度の差はあるが、ほぼ全員のイメージや思いが生かされたことは評価できる。しかし、活動が進んだりグループの人数が増えることによって、一部の意見に流される傾向があったのは、指導者側の支援不足であり反省点として残る。

#### ウ. 他とのバランスを考えた音量等を工夫した活動 (感受・表現の工夫、表現の技能)

アンサンブル活動で最も大切なポイントはバランスである。音量ばかりでなく、音色や奏法・速度等、様々な意味でのバランスが要求された。歌唱領域や器楽領域では、ある程度の技能が伴えば、バランスを工夫するゆとりはあったが、リズムでは、「自分の演奏で精一杯」という状況の中で、難しい場面が多かった。

#### エ. 発声・楽器演奏・ボディパーカッション等、技能的向上 (関心・意欲・態度、表現の技能)

前述したように、技能面の差は、個々の音楽経験や意識の違いから最も明確に現れる項目である。どんなに意欲的学習し、強いイメージを持って臨んでも、一定の技能が伴わないために、音楽として実現できないケースも見られた。

効果があったのは、少人数のグループであるがために、他児の技能表現力を身近に知ることができ、「こんな風に演奏したい」「〇〇さんのように歌いたい」といった目標が生まれる条件に恵まれたことである。リズム創作でも、見よう見まねで練習していく中で、リズム感を養い技能を高めるといった効果もあった。

#### オ. 以後の合唱や合奏への関心の高まりや意識の変容 (関心・意欲・態度、感受・表現の工夫)

この項目は、本題材終了段階では判断できないことである。以後の題材において、学習事項が生かされて、楽しい学習が展開されることを期待し、実践例報告を締めくくる。